

盆地の北一帯は南陽市が占めている。最近生まれたばかりの新しい市である。宮内・赤湯・和郷村の三つが合併してできた市である。宮内は昔、製糸業がさかんであった。赤湯には温泉があり山の斜面を利用したブドウ栽培がさかんである。

川西町は盆地の西部にあり、農業の比重の最も重い地域である。鬼面川の扇状地面には散居集落が発達しており、経費規模の大きな農家が多い。肉牛の肥育がさかんであるが、工業はめざましいものがない。

高島町は盆地の東部を占め、多種類の産業がさかんに行われている。農業では、米作、果樹、酪農。果樹栽培もブドウ、洋梨、リンゴと多岐にわたっている。工業も古くからの製米と共に電気関係のもの、果物の加工など豊富な伏流水を利用しておこなわれている。

これら2市2ヶ町にまたがる米沢盆地は、山形県の米の一大産地であり、文明の入口ともなっている。広い平野と豊かな人口をもちながら、地域全体としての発展は必ずしも明るいものではない。農業についても、工業についても近代化を更に迫られ、今その曲り角に立っている時である。米沢盆地は米作とは切っても切れぬ関係にあるのであるから、その基本的立場のもとに今後の道を切り開いてゆくべきである。ただしそれは今までとは違い、量の問題から質の問題へとその中心課題を変えて考えてゆくべきことと思う。米作のみに限ったことではなく――

岩手県金ヶ崎町の酪農

北 沢 桂 子

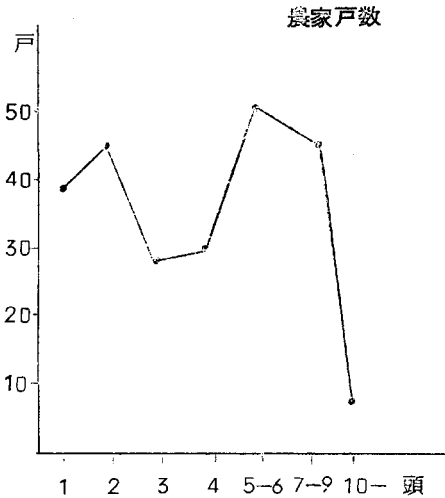
本論文では、金ヶ崎町の酪農について考察し、内包する問題点及び動向を明らかにすることを目的とした。卒論構成は次の通りである。第一章、日本の酪農及び岩手の占める位置、第二章、金ヶ崎町の概観、第三章、金ヶ崎町の酪農、第四章、飼料構造、第五章、金ヶ崎町における酪農振興計画、第六章、要約。

本町は、岩手県南内陸部に位置し、町の東端を東北本線が走っている。ここは、第1次産業就業人口が約70%を占める農業の町であり、経営の大規模化、専門化の他に、馬から牛と豚の農業への変化が顕著である。

酪農について見ていくと、1戸当平均乳牛飼養頭数、改良草地面積、牧草畑面積が、県内陸地区の中で最も多く、かつ広い。第1図の乳牛頭数規模別農家戸数をみると、ピークが2つあり、本町の酪農が大きく2つの営農形態、即ち畑酪農と水田酪農に分かれていることがわかる。従って本町の県南内陸地区における酪農の卓越性は、この畑酪農の存在によるものと思われる。

<第1図>

乳用牛2才以上飼養頭数規模別



もともと北上川流域の水田地帯として、米作に依存してきた金ケ崎町において、酪農の気運が盛んになったのは、昭和24年頃からである。そして、町の東部沖積低地に水田酪農地帯が形成されていったのだが、ほぼ時を同じくして、もう1つの酪農地帯が丘陵地に形成された。これは主に、戦後入植した開拓農家によるものであり、入植当時は雑穀を主とした耕種農業を営んでいた。ところが、昭和28、29年に冷害に襲われ畑作物は全滅に近い被害を受けてしまった。この冷害が1つの契機となり、そして当時の酪農ブームも手伝って、冷涼湿潤な気候の影響をあまり受けない、畑酪農へと移行し、ここに酪農団地の発足をみたのである。

こうして本町の畑酪農地帯は、他の開拓地と比べて官有地の解放面積が広がったため、1戸当平均耕地面積が大であったこと、満州から引揚げ者で大規模経営の経験者が多かったこと、公共資本の投下が大きかったこと、計画的集団の入植であることから、合理的地割が可能であったこと、又部落内での営農形態はほぼ同じであることから、集団作業、集団購入及び集荷が容易であったこと、良き指導者に恵まれたこと等の条件が相互に作用しあって、今日の地位を築いたものと思われる。更に41年3月に、駒ヶ岳山麓開拓者事業が発足し、水田酪農家の発展を促すために、西部丘陵地に約400haほどの採草地が造成され、その際開拓道路、幹線、支線道路が造られた。この道路の完成は、畑酪農地と町との時間的距離を縮め、ここにおいて畑酪農地帯は更に大きく発展した。

又、この事業は本来、水田酪農家へ草を提供し、飼料基盤を確立することを目的としたものであるが、採草地が町から10～15km離れていること、傾斜地であり且つ地力が乏しいので、管理を良くしないと忽ちのうちに荒地になってしまうこと、ヘルパー雇用等の問題があるため、水田酪農家による採草地の管理は、労働力の点で行き詰まるのではないかとされる。その結果採草地は、隣接する畑酪農家によって吸収され、畑酪農家の大規模化及び水田酪農家の小規模縮小化の傾向は、今後ますます強まっていくものと考えられる。